

〈Education Study Report〉 A Practice Report of
Practical Seminar for the Child Care and
Teaching Profession in 2012

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木谷, 安憲, 増南, 太志, 笠井, かほる メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/372

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



平成 24 年度保育・教職実践演習の実践報告

木谷 安憲・増南 太志・笠井かほる

1 はじめに

1.1 「教職実践演習」について

平成 21 年 4 月教育職員免許法施行規則の改正により、教員免許取得のための教職に関する科目であった「総合演習」に変わり「教職実践演習」が新設され、必修となった（平成 22 年度入学者から適用）。『文部科学省「教職実践演習（仮称）について』』によれば、「教職実践演習」は、教職課程の履修や様々な活動を通じて、学生が身につけた資質能力が、教員として最小限必要な資質、能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標に照らして最終的に確認するもので、「学びの軌跡の集大成」として位置付けられる。将来、教員になる上での課題を自覚し、不足している知識や技能などを補い、その定着を図り、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。

保育士養成課程においても、保育実践演習が総合演習と置き換えられることから、平成 23 年度より「保育・教職実践演習」は、資格・免許取得の総仕上げとして、2 年後期の教科に位置づけられた。

教員・保育士として求められる資質・能力としては、①使命感や責任感、教育的愛情などに関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③子ども理解や学級経営に関する事項、④教科・保育内容などの指導力に関する事項、の 4 つの事項を含めることが求められている。

授業内容としては、理論と実践の有機的な統合を図るための学修、学生による主体的な学修がもとめられ、知識や技能の定着を図る学修方法の例として①役割演技（ロールプレイング）、②事例研究、③現地調査（フィールドワーク）、④遊び、放課後の補充指導、⑤模擬授業・模擬保育と指導法の研究、などがあげられている。また、「保育・教職実践演習」の授業目的に照らし、教員・保育士としての最小限必要な資質能力が形成されたかを確認するためのチェック表として、履修カルテ（授業カルテ）が用いられる。

1.2 本学の取り組みと授業計画

授業の方法はオムニバス形式、ゼミ形式、他の演習科目と同様の授業、学校行事などを活用した授業、集中授業などさまざまな形態が考えられるが、新しい教科でもあることから各大学が試行錯誤している状態である。本学では、平均 25 名程度の小グループ授業と合同授業の 2 種類の形態で授業を行った。

2 平成 24 年度保育・教職実践演習の内容

保育・教職実践演習の全 15 回の内容は以下の通りである。

① オリエンテーション

第 1 回は、「保育・教職実践演習」の教科の趣旨とねらいについて述べ、15 回授業の予定を説明した。

② 履修カルテ（授業カルテ）による振り返り

第 2 回では、履修カルテ（授業カルテ）をもとにした自己評価シートを使用した。自己評価シートは、教員・保育士として最小限必要な資質能力が形成されたかを確認するものであり、授業ごとに関連する項目について点数化するチェック表となっている。点数化をとおして、自身の資質能力についてどのように捉えているのかを明確化し、自己の課題を抽出するとともに、自信を持てたところを把握し、今後の教員・保育士として励みとなることが期待される。本学では、授業ごとの評価を「子どもについての理解」「コミュニケーション」などの項目ごとに資質能力が十分ある、資質能力が概ねある、努力が必要であると 3 段階で整理し、各自の課題を振り返らせた。

③ 外部講師による現場の話と卒業生による体験談

第 3～5 回は外部講師による講義であった。履修者全員を対象とし、授業は全員を集めた大教室で行われた。

第 3 回は安見克夫（板橋富士見幼稚園園長・東京成徳大学教授）による「教師としての資質・能力」という講義が行われた。教師の資質として「子どもと夢中になって遊べること」「今日の今しかない、という気持ちで子どもと向き合えること」「笑顔で一日いられること」などをあげていた。また、子どもに折り紙をもらった時には「ありがとう」で済ますのではなく、「これどうやってつくったの？」「先生にも教えてほしいな」と声かけをすると「園児とすぐに打ち解け

ることができる」というように、具体例をあげて話された。

第 4 回は井口美恵子（前東京都公立幼稚園教育研究会会長・前東京都板橋区立高島幼稚園園長）による「初年度の幼稚園教諭に求められる資質・能力」という講義が行われた。導入で行ったコアラの手遊びは、ほとんどの学生にとって新しい手遊びのレパートリーとなった。初年度の先生にとって大切なこととして、「挨拶は、大きな声で自分から行うこと」「上手くいかないのは当たり前、と物事に取り組みば上手くいくこと」「子どもと一緒に勉強して一緒に感動する教師になるよう、自分の体験を増やすこと」などを話された。

第 5 回は羽柴継之助（元児童相談所長・埼玉育児院理事長）による「保育士としての資質・能力～児童養護施設の保育士にもとめられるもの～」という講義が行われた。「育児院や養護施設の子ども達は、心を閉ざしていることが多いので、寄り添っていく姿勢が大切である」「子どもとの関係を良くすれば保護者との関係も良くなる」という話から、養護施設の職員というのは「大人に不信感を抱いている子ども達と向き合い続ける仕事である」という認識を学生は持ったようだ。講義の最後には、「親に暴力を振るわれて施設に入ったのに、施設でもいじめをうけてしまう」「施設を出てから大学の教授になった者もいれば、暴力団に入った者もいる」という現実も話された。

第 6 回は、卒業生である幼稚園勤務 3 年目の女性、保育園勤務 1 年目の女性、施設勤務 3 年目の男性の計 3 名による講義だった。あらかじめ学生から募っておいた質問に答えていくという形式で進行した。4 ヶ月後に就職を控える学生にとっては関心のある話題が多かったようで、授業直後には、「子どもの成長を見られることが一番嬉しいと聞き、この仕事は子ども達のおかげで頑張れる仕事なのだった」「施設の夜勤では、利用者の状態によって寝ることができない日もあると聞き驚いた」「就職したら、毎日早めに行ってできることは進んでやりたい」「就職したら子ども達の名前と保護者のことをすぐ覚えたいと思った」「ピアノの練習をしておくことや、エプロンシアター、ペープサートなど子どもの注目を集められるものを就職するまでにつくっておきたい」「障害を持った方達への対応や言葉がけは本当に大変なものだと感じたが、その分やりがいを感じられる仕事なのだった」などの感想があった。

④ クラス授業と全体での発表（「平成 24 年度 保育・教職実践演習 学びのふりかえり」）

第 7～14 回は、A から G のクラスごとにそれぞれの教室で演習が行われ、第 15 回では全クラスによる学びを共有するための発表が全員を集めた大教室で行われた。発表は学生、教員の順で、持ち時間は各クラス 7 分間だった。参考資料として配られた表に加え、ここで発表されていたことをクラスごとにまとめた。

A クラスの発表内容

- 第7回 第8回 実習での学びのふり返りを一人ずつ発表する①②
- 第9回 校外学習①（都内公立障害児保育施設への見学と園長の講話，事後レポート作成）
- 第10回 発表へ向けての準備①（内観法の理解と内観法を用いた実践および理論）
- 第11回 発表へ向けての準備②（グループに分かれての意見交換と意見の集約作業）
- 第12回 発表へ向けての準備③（グループ毎に発表用ポスターの作成）
- 第13回 発表へ向けての準備④（発表のためのリハーサル，プレゼンテーションスキルの習得）
- 第14回 校外学習②（都内公立小学校での授業見学と学校長の講話の拝聴，事後レポート作成）

*実際の授業数は上記より3，4回分多い。校外学習，発表準備など想定より時間が必要。

Aクラスでは「2年間の学校での学びと，実習などで体験した現場での学びを融合させること」をテーマとして演習を進めてきた。全体発表では各学生が「①感謝していること，②感謝されたこと，③ごめんなさいという気持ちになっていること」について具体的に発表し，その上で「三つの観点と初心を忘れないようにして保育の現場に臨みたい」「感謝の気持ちを忘れずにがんばる」という，就職した際に大切にしたいことを導きだしていた。「感謝の意識」は自己肯定感を高めるため，「ごめんなさいの意識」は，できないことを自覚した上でそれを4月以降はできることに変えていくことを目的に考えたものである。

B クラスの発表内容

- 第7回 自己紹介
- 第8回 教職実践演習カルテの使い方について
- 第9回 子どもを知る 第10回 子どもとは
- 第11回 タイガーマスク運動に見るやさしさとは
- 第12回 子どもや人に対してやさしくするとは一討論
- 第13回 第14回 子どもは純真なのか①②

Bクラスでは「子どもを理解し，教師としての指導に生かすこと」をテーマとして演習を進め，実習だけでは分からないことについて考察した。全体発表では水谷豊主演のテレビドラマ『熱中時代』に出てきた「嘘をついた子ども」を理解できるかどうかや，ランドセルなどをプレゼントする「タイガーマスク運動」とアニメ『タイガーマスク』における孤児院育ちの主人公との比較から考えた「やさしさ」のありかたについて代表学生が意見を述べた。子どもの嫌な部分も見ていくことで，実際仕事をした時に役にたつのではないかと，という問題意識のもと，子どもに対する理解を深めていった。

C クラスの発表内容

- 第7回 第8回 自己課題の明確化①（カルテの検討） ②（グループワーク）
- 第9回 模擬保育の内容、指導案の検討（グループワーク）
- 第10回 模擬保育の実施（1年生 30名を対象とした遊びの提案）
- 第11回 絵本選書にかかわる基本についての講義
- 第12回 選書からアクティビティへの展開
- 第13回 授業のふりかえり（グループワーク）
- 第14回 自己目標の設定へむけて（レポート作成）

Cクラスでは模擬保育や絵本選書などの実践的な活動に加え、2年間の学びをまとめるレポート作成が行われた。レポートでは、理想と現実の間で苦しみながらも成長してきた学生の様子が反映されていた。全体発表では模擬保育で行われた縄跳び 50本と雑巾 100枚を使った体育館での活動の様子や、人の動かし方、ルール説明の難しさについて話された。また、保育者が選んだ絵本の影響について「その1冊の桃太郎が、その子どもにとっての桃太郎を決定づける」「より多くの絵本を知らないと、年齢や発達段階に合わせた絵本を選ぶことができない」とまとめられた。

D クラスの発表内容

- 第7回 自己課題の明確化
- 第8回 第9回 模擬保育・テーマ・活動内容・指導案の検討（グループワーク）
- 第10回 演習：保育者としてのスキルアップ：「表現力」／模擬保育①
- 第11回 演習：保育者としてのスキルアップ：「コミュニケーション力」／模擬保育②
- 第12回 演習：保育者としてのスキルアップ：「構成力」／模擬保育③
- 第13回 演習：保育者としてのスキルアップ：「洞察力」／模擬保育④
- 第14回 授業のふりかえり 自己目標の設定

Dクラスでは「保育者としての総仕上げ」をテーマとして演習を進めてきた。自己評価と他者評価を比較することで自己課題を明らかにする。その後指導案を作成し模擬保育を構成するという活動を行った。自己課題を克服するために、あえて苦手なピアノを使った模擬保育を行った学生もいた。全体発表では、「子ども一人一人の表現を大切にしたい」「活動ごとの区切りをしっかりとつけ、子どもの意識を保育者に向けてもらうことが大切」「活動の流れをスムーズにするための援助や保育者の立ち位置について」などの意見が出された。これらの演習を通じてこれから保育者になる上での自己目標を具体化させていった。

E クラスの発表内容

- 第7回 自分ほぐし：エンカウンターでいろいろな履修生と触れ合う
- 第8回 自己紹介・ゲストティーチャーからの学びのシェアリング
- 第9回 “学びほぐし1：絵本の選び方，それでいいですか？（ゲストティーチャー M 先生）”
- 第10回 “マッピングによる履修生の課題状況の確認・学びほぐし1の学びのシェアリング・保育実践の中の人権に関するアンケート”
- 第11回 “アンケート結果から 保育実践の中の人権に関する話し合い（グループ討議）”
- 第12回 保育実践の中の人権に関する話し合い（グループ討議）
- 第13回 “学びほぐし2：当たり前前の保育実践を疑え！ 保育実践の中の人権に関する話し合い（食事，排泄，唱え言葉による保育，遊ぶ権利，表現活動）→自分ならどうする？”
- 第14回 人権に関する学び・演習を通じた学びのシェアリング

E クラスでは「学びあうこと」「当たり前とと思っていることを問い直すこと」をテーマとして演習を進めてきた。同じ話を聞いても，同じ場所で体験しても人それぞれ受け止め方が異なる。違った意見を共有することで他者を理解すると同時に，自分の学びが見え，広がり，深まる。このクラスでは，それを保育者として身につけるべき基本的な考えとしている。演習では，絵本の選び方，保育実践についての自己評価，保育実践の中の人権についての話し合いなどに取り組んだ。発表では，「子どもを子どもとして大切にはぐくむ，という考え方を教わった」「自分が今は嫌だと思っているようなことを，就職したら平気でやってしまうような保育者にはなりたくない」「自分たちが保育者になったらどうするか考えることができた」という意見が出された。

F クラスの発表内容

- 第7回 評価表から自己課題の認識（点数細分化とグラフ作り）
- 第8回 気づきの実践（自然の探索）チェックシートとレポート
- 第9回 自然の素材を生かした制作（どんぐり，ひょうたんなど）作品提出
- 第10回 10回～13回 1人15分の活動の指導案を作成
- 第11回～第13回 指導案添削（事前）と模擬保育（1日5人発表），全員による評価
- 第14回 ゼミ単位の授業の学びのふりかえり（レポート提出）

子ども達のことを読み取るためには普段気づいていないようなことも含め，色々なことに気づかななくてはならない。F クラスでは「保育者としての気づき」をテーマとして演習を進めてきた。発表では，通学路の自然観察で60種類以上の植物を見つけたこと，葉っぱや木の実などを使った制作について触れ，ひょうたんを使った音のでるマラカスなど制作した楽器を披露した。後半に行った模擬保育では，折り紙をつかった作品作り，絵本の読み聞かせ，季節にちなんだ制作活

動などを行い、全員に批評してもらった。子ども達に「何をどう伝えるか」「どう発展させていくか」は、「保育者が持つ柔軟性、探究心、気づきによって変わってくる」とまとめられた。

G クラスの発表内容

第7回 履修カルテを使ってのふりかえり

第8回 ミニ模擬授業（全員） 折り紙指導

第9回 第10回 「先生になった自分を励ます言葉」制作・発表

第11回 制作 コミュニケーションをテーマにした15見開きのミニ絵本

第12回 発表 「自分が読んだ本の中から、先生になったら役に立つこと」

第13回 ワーク 「初めての親子参観日で、保護者に話す」

第14回 発表 「初めての親子参観日で、保護者に話す」

具体的なノウハウを身につけるよりも、まずは保育者としての姿勢を身につけさせるために、Gクラスでは「保育者として何をするかだけでなく、保育者としてどう在るか」をテーマとして演習を進めてきた。発表では「先生になった自分を励ます言葉」で制作したボードを提示し言葉を読んだ。初めての保育参観で担任として保護者に挨拶をするという設定のワークでは「①初めての担任なので、いかにして保護者に安心してもらうか、②園の方針や自分の教育観をどう説明するか、③ゆっくりと落ち着いた声で話ができるか」という観点到留意することを説明し、代表者により、幼稚園教諭になりきることを課せられた発表が行われた。その姿勢や言葉が、学生が頭を使って考えたものというより、本当の幼稚園の先生のように感じられたせいか、発表後は大きな驚きの拍手になった。

発表会全体を通して分かったことは、担当者によってさまざまな演習になるということである。演習内容の違いについては、ゼミを母体としたクラス編制であったため、アンケートで不満を漏らす学生はいなかった。

3 学生の感想

3.1 学生の感想の整理方法

本学における保育・教職実践演習の実践結果を整理するため、授業の最後に学生に記載させた感想をデータとして用いた。学生の感想を用いた理由は、①学生にとって、保育・教職実践演習のどの部分が特に印象に残っているのかを把握すること、②保育・教職実践演習をとおして身につけて欲しい内容がどこまで感想に反映されたかを把握すること、③これらをとおして、今後の

実践演習の内容の改善に役立てるためである。

感想は自由記述であり、それらの記述の中に、どのような内容が含まれているのかをピックアップし、「卒業生の話・現場の話」「発表について」などの内容ごとに集計した。例えば、「授業カルテ」については、2人のみ記述していたというように、内容ごとにどのくらいの数の学生が記述しているのかをデータとした。なお、記述内容は、第1～6回及び第15回に実施された「全体授業に関する内容」（カルテ、卒業生の話、現場の話、発表）と第7～14回に実施された「各クラスの活動に関する内容」についてカテゴリー化した。

3.2 学生の感想からみた保育・教職実践演習の主な結果

学生の感想からみた保育・教職実践演習の主な結果を表1に示した。表1の左上は、「全体授業に関する内容」と「各クラスの活動に関する内容」を記述した学生数であり、表1の左下は、全体授業の内、どのような内容について記述しているのかを示したものである。また、第15回目の全体授業で実施された「発表」についてはさらに細かく分類した。表1の右側は第7～14

表1 学生の感想からみた保育・教職実践演習の主な結果

内 容	学生数 (割合)	クラス	各クラスの活動の内容詳細	学生数 (割合)
全体授業に関する内容	101/103 (98.1)	A	実習の振り返り	5/6 (83.3)
各組の活動に関する内容	100/103 (97.1)		学外補講	4/6 (66.7)
全体授業の内容詳細	記述した学生数	B	自己紹介	2/11 (18.2)
			子ども理解	10/11 (90.9)
		C	模擬保育	12/18 (66.7)
			絵本選書について	14/18 (77.8)
			レポートによる振り返り	2/18 (11.1)
		D	自己課題・模擬保育	13/13 (100.0)
			スキルアップ	1/13 (7.7)
		E	自分ほぐし	8/21 (38.1)
			絵本の選書について	11/21 (52.4)
			子どもの人権	11/21 (52.4)
			学びのシェアリング	10/21 (47.6)
		F	自然の探索	14/17 (82.4)
			自然の素材を生かした制作	7/17 (41.2)
		G	先生になった自分を励ます言葉	11/17 (64.7)
			制作	6/17 (35.3)
			初めての親子参観日	9/17 (52.9)
		自己評価シート	2/103 (1.9)	
卒業生の話・現場の話	9/103 (8.7)			
発表について	100/103 (97.1)			
・他のクラスを聞くことができた	95/103 (92.2)			
・実習に関すること	3/103 (2.9)			
・先生になった自分を励ます言葉	4/103 (3.9)			
・初めての親子参観日	12/103 (11.7)			
・ありがとうとごめんなさい	4/103 (3.9)			
・自然、楽器などの制作	13/103 (12.6)			
・模擬保育	8/103 (7.8)			
・子ども理解	4/103 (3.9)			
・折り紙を使った指導	1/103 (1.0)			
・雑巾を使ったゲーム	3/103 (2.9)			
・絵本の選書について	2/103 (1.9)			

回の各クラスの授業の内容について記述した学生数である。表 1 の左上と左下は全学生が対象となるため、103 名が総数となるが、表 1 の右側はクラスごとに人数が異なる。表 1 を見ていくと、ほとんどの学生が「全体授業に関する内容」、「各クラスの活動に関する内容」を記述していた。「全体授業に関する内容」としては、第 15 回の発表の直後に感想を書いたこともあり、「発表について」に関する感想が多かった。一方で、「履修カルテ（授業カルテ）をもとにした自己評価シート」や「卒業生の話・現場の話」に関して記述した学生は少なかった。「発表について」に関しては、ほとんどの学生が「他のクラスを聞くことができた」という感想であり、具体的な内容については、学生間で分散しているようであった。「初めての親子参観日」と「自然・楽器の制作」について記述する学生が比較的多くみられた。

4 評価方法

クラス単位の授業では各クラスにより授業内容、課題も異なる。授業担当者 7 名で話し合った結果、不公平にならないようにという配慮と、出席が良好な学生は、自己の資質・能力を高めようとする意欲が高いとみなし、評価は基本的に出席回数を基準にした。

- 欠席回数 0～1 優（欠席 1 回までの学生は 平常点が悪くても優のまま）
- 欠席回数 2 優（平常点などが悪ければ良）
- 欠席回数 3 良（平常点などが良ければ優、平常点が悪くても可にはしない）
- 欠席回数 4 良（平常点などが悪ければ可、平常点が良くても優にはしない）
- 欠席回数 5 可（平常点などが良ければ良）
- 欠席回数 6 不可

この基準内で素点は担当教員に一任されることとなった。

5 おわりに

「保育・教職実践演習」は新しい教科だけに、文部科学省の意図する内容を各大学でどのように授業内容に具体化していくか、どこの大学も試行錯誤している状況が現実のようである。多くの教員の共通認識が必要であり、外部講師との打ち合わせも含め、授業準備に多大な時間がとられるとともに、担当教員の専門性の生かし方など今後課題の多い授業であったが、学生にとっての「学びの軌跡の集大成」であることを念じた授業であった。

履修カルテ（授業カルテ）をもとにした自己評価シートにより、各学生は、学んだこと、自己課題を再認識し、教員・保育士として資質能力が総合的に評価され、今後の課題が明確になった

と思われる。しかし、履修カルテ（授業カルテ）は教科ごとに用意されていたため、それを一つの自己評価シートにまとめる際には、履修カルテ（授業カルテ）の紛失や整理の煩雑さが課題となった。今後の履修カルテ（授業カルテ）は評価用紙を一冊にまとめるなどの対応が望まれる。また、自己評価シートの記入は第2回目の保育・教職実践演習という、比較的早い回で行ったこともあり、この教科自体をはっきり理解できないまま取り組んだ学生も多く、教科の目的・目標をしっかりと押さえさせる必要性を感じた。

外部講師による現場の話は、教職実践演習の実施に当たっての留意事項の「現職の教員又は教員勤務経験者を講師とした授業を含めること」からの計画であったが、現職教員の貴重な生の声に学生たちは熱心に聞き入り、大変好評であった。講義後の感想では、就職試験や、現場でやっていけるかなどの精神的な不安が減り、激励を受けたとの感想が多く、印象的であった。また、保育士を対象とした施設に関する講義では、日常経験できないような話も聞け、小学校、幼稚園免許希望の学生たちも熱心に話を聞いていた。学生の感想を、講師の方々に御礼状とともに郵送したところ、学生の授業に対する反応を知ることができ、講師自身も現職を振り返る良い機会であったと大変喜んでいただけた。

クラス別の授業では、2つのゼミをペアとしたことから、分野の異なる指導が受けられ、教員、学生双方が指導学びの幅が広まった。内容は指導案作成、模擬授業・模擬保育、指導法、事例研究、フィールドワークなどさまざまであり、その全体発表は、他のクラスの授業内容を聞いたこともあり、学生にとって最もインパクトがあったようだ。一方で、希望免許の異なる学生が混在する状況での授業内容をどうしていくかは今後の課題である。

今年度の保育・教職時実践演習は、反省点があるにせよ、全体的には目標をほぼ達成できたのではないと思われる。

引用文献等

文部科学省「教職実践演習（仮称）について」

〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm〉（2013年9月22日アクセス）。

（提出日 平成25年9月30日）